

## 恐れてはならない

[聖書] 出エジプト記 14章5～31節

民が逃亡したとの報告を受けると、エジプト王ファラオとその家臣は、民に対する考えを一変して言った。「ああ、我々は何ということをしたのだろう。イスラエル人を労役から解放して去らせてしまったとは。」ファラオは戦車に馬をつなぎ、自ら軍勢を率い、えり抜きの戦車六百をはじめ、エジプトの戦車すべてを動員し、それぞれに士官を乗り込ませた。主がエジプト王ファラオの心をかたくなにされたので、王はイスラエルの人々の後を追った。イスラエルの人々は、意気揚々と出て行ったが、エジプト軍は彼らの後を追いついた。ファラオの馬と戦車、騎兵と歩兵は、ピ・ハヒロトの傍らで、ハアル・ツェフォン前の海辺に宿営している彼らに追いついた。ファラオは既に間近に迫り、イスラエルの人々が目を上げて見ると、エジプト軍は既に背後に襲いかかろうとしていた。イスラエルの人々は非常に恐れて主に向かって叫び、また、モーセに言った。「我々を連れ出したのは、エジプトに墓がないからですか。荒れ野で死なせるためですか。一体、何をするためにエジプトから導き出したのですか。我々はエジプトで、『ほうっておいてください。自分たちはエジプト人に仕えます。荒れ野で死ぬよりエジプト人に仕える方がましです』と言ったではありませんか。」モーセは民に答えた。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。あなたたちは今日、エジプト人を見ているが、もう二度と、永久に彼らを見ることはない。主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。」

主はモーセに言われた。「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に命じて出発させなさい。杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの人々は海の中の乾いた所を通ることができる。しかし、わたしはエジプト人の心をかたくなにするから、彼らはお前たちの後を追って来る。そのとき、わたしはファラオとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を現す。わたしがファラオとその戦車、騎兵を破って栄光を現すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。」

イスラエルの部隊に先立って進んでいた神の御使いは、移動して彼らの後ろを行き、彼らの前にあった雲の柱も移動して後ろに立ち、エジプトの陣とイスラエルの陣との間に入った。真っ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、互いに近づくことはなかった。モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼らの右と左に壁のようになった。エジプト軍は彼らを追いついた。ファラオの馬、戦車、騎兵がごとごとく彼らに従って海の中に入って来た。朝の見張りのころ、主は火と雲の柱からエジプト軍を見下ろし、エジプト軍をかき乱された。戦車の車輪をはずし、進みにくくされた。エジプト人は言った。「イスラエルの前から退却しよう。主が彼らのためにエジプトと戦っておられる。」

主はモーセに言われた。「海に向かって手を差し伸べなさい。水がエジプト軍の上に、戦車、騎兵の上に流れ返るのであろう。」モーセが手を海に向かって差し伸べると、夜が明ける前に海は元の場所へ流れ返った。エジプト軍は水の流れに逆らって逃げたが、主は彼らを海の中に投げ込まれた。水は元に戻り、戦車と騎兵、彼らの後を追って海に入ったファラオの全軍を覆い、一人も残らなかった。イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んだが、そのとき、水は彼らの右と左に壁となった。主はこうして、その日、イスラエルをエジプト人の手から救われた。イスラエルはエジプト人が海辺で死んでいるのを見た。イスラエルは、主がエジプト人に行われた大いなる御業を見た。民は主を畏れ、主とその僕モーセを信じた。

### [序] バプテスト教会の特色

昨日上尾教会で江ヶ崎清臣先生の葬儀が行なわれました。去る11日に教会交流で上尾に伺った時、肺炎で6日に入院されたとのことでした。肺炎の細菌が特定出来ず、薬が合わなくて症状が好転しないと奥さんが言っておられました。その後病状も落ち着き、食事を懸命にとって体力の回復に努力しておられたそうですが、29日早朝、心不全で永眠されました。

享年80歳。高齢者にとって肺炎は怖いですね。

先生は常盤台教会でバプテスマを受け、西南の神学部を卒業後、富野教会牧師4年。連盟の出版課主事(主に機関紙バプテストを担当)を長く勤め、その傍ら市川教会の再建にあたり、1977年連盟事務所を退職して藤沢教会に赴任、21年勤められました。70歳からは越谷伝道所の再建に6年間当り、その後上尾教会に籍を置いて、無牧師の教会の説教奉仕に当ってこられました。私と同じように肺結核で長く療養された方です。温厚堅実な人柄でした。淋しいです。

さて先週の月曜から水曜までの3日間、天城山荘で行なわれた神学セミナー「バプテストと礼拝」に出席しました。65人の参加者で、礼拝の大切さをあらためて色々と考えさせられ、私にとっては大変有益な研修でした。矢張り年をとるほど、時間も費用も惜しまずに勉強しなければいけないと痛感させられました。

吉高牧師が、NCC の会合で他教派の牧師たちと教会学校の働きについて話し合うと、「全年齢層の教会学校」こそ、まさにバプテスト教会の特色だと気付かされると言っていました。或る人たちが集まって聖書研究に打ち込むというのなら、どこの教会にでもみられます。しかし教会員全体が求道者も交えて、毎日曜日に聖書を自分たちでこつこつと学び、分かち合い、聖書に養われる生涯を送るという成人科分級は、バプテスト以外には見られません。聖書を皆で学び合い、死ぬまで御言葉に養われて信仰生活を全うして行くことが大切なのですね。

その点で、私たちの教会は欠けています。先日上尾教会で成人科の分級を学びました。行かなかった方も多いので、今度上尾から来ていただいたら、上尾の成人科分級をここで再現していただいて、川越教会でも聖書を継続して学び合う成人科分級を、発足させていただきたいと、牧師として願っています。以前に宮原伝道所の礼拝に二度出席しましたが、あそこでも礼拝出席者全員で5クラスに分かれて、とても良い分級をしていました。4月29日にいよいよ教会組織をなさいます。川越教会の皆さん、どうぞ宜しくご理解ください。

もう一つ、日本バプテスト同盟深川教会の柳澤嗣世牧師のお話も大変参考になりました。先生は50歳過ぎまで普通の家庭の主婦でした。お連合いが定年退職を迎え、同盟の宣教研究所で牧師になる勉強を始めたので、自分も一緒に始めました。そして卒業後夫婦一緒に、もう直ぐ創立100年を迎える古い教会に伝道師として赴任しました。しかし牧師が役員と衝突して辞任、柳澤師のお連合いが牧師になりましたが、お連合いも役員と衝突して辞任。柳澤師に牧師のお鉢が回ってきました。そしてこの婦人牧師が、古くて難しい役員たちとの新しいチームワークを築いて、教会を再生されたのでした。

説教が難しいとか物足りないという不満に対して、先生は説教準備に全力を注ぎました。同時に説教の良い聞き手になってもらうために、先ず役員に説教者になってもらいました。どうしても出来なければ、役員以外からも説教者を募りました。注解書や参考書の丸写しの原稿は絶対にお断り、自分の信仰の言葉を求めました。そして皆で励まし合いました。自分たちの仲間が説教の奉仕に当ることは、決して他人事ではありません。こうして皆が真剣に説教を聞き、また説教者を支える礼拝者になってきたそうです。現在、教会員30人余の内に信徒説教者が6人、年に1～2回奉仕しているそうです。これもバプテスト教会ならではの礼拝です。

私も札幌教会時代、やはり教会員で説教チームを作って、礼拝奉仕に当たりたいと願っていました。それを現実にしておられる教会を知って、嬉しくなりました。そしてそれまで牧師の経験を持たないのに、バプテスト教会の核心をさっと把握して、見事に実行なさった柳澤牧師に心からの敬意を覚えました。川越教会も信徒説教者を生み出していきたいですね。

## [1]滅びの海に道が開け

さて今日の聖書は、小見出しに「葦の海の奇跡」と記されている箇所です。国王の頑迷さ故に、とうとう神さまの厳しい裁きがエジプトに下りました。家々の初子が死ぬという悲劇に見舞われて、エジプト全土が、

嘆きの叫びで覆われました。ところが小羊の血が門の柱と鴨居に塗られてあるイスラエルの民の家は、裁きが過ぎ越して、初子が一人も死にません。さすがの国王も、イスラエルの解放は主なる神さまの指示であることを認めざるを得なくなりました。

彼は夜中のうちにモーセを呼び出して、願い通りにイスラエル全員が家畜も含めて、直ぐに出て行くようにと命じました。こうして150万人を超える奴隷の大集団が、ラメセスを出発して、カナンの地に戻って行くことになりました。彼らは隊伍を整えて、意気揚々と出発しました。

ところがここで神さまは実に不可解な命令をモーセになさったのです。13章17節以下をご覧ください。神さまはカナンに至る近道のペリシテ街道には導かず、荒れ野の道を迂回させたのです。さらに14章2節をご覧ください。迂回した後で、また引き返せとおっしゃったのです。

こうして彼らは葦の海、多分紅海でしょう。その海辺で宿営していました。

その様子の報告を聞いた国王は、イスラエルの大集団が道に迷い立ち往生していると受け取りました。そしてまたまた考えを豹変したのです。「ああ、我々は何ということをしたのだろう。イスラエル人を労役から解放して去らせてしまったとは」。直ちに戦車隊を総動員してイスラエルを追跡させたのでした。大勢の奴隷を失うことがそれほど国家的大損失だったのです。

紅海のほとりにのんびりと宿営していたイスラエルの人々は、背後から迫ってきたエジプトの大軍に気がつきました。前面は海です。絶対絶命の窮地に立たされてしまったのです。そのことに気付いた彼らは、非常な恐怖に襲われ、主に向かって叫び、またモーセに言いました。「エジプトに墓がないので、荒れ野で死なすために、我々を連出したのか」

それに対するモーセの答えです。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。あなたたちは今日、エジプト人を見ているが、もう二度と、永久に彼らを見ることはない。主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。」

神さまはモーセに海に向かって前進するよう命じられました。彼が神の杖を高く上げ、海に向かって差し伸べますと、海の中に道が開け、イスラエルは向こう岸に渡ることが出来たのです。そして再び海水が元に戻った海の中で、追跡してきたエジプト軍は溺死してしまいました。

海とは私たちの命を呑みつくす滅びを現します。私たちの行く手に立ちはだかる滅びの真っ只中に、一筋の道が開けてくる。滅びを突き抜けて、新しい人生が展開されていく。神さまは、万事休すと観念した時点で、このような不思議な救いをもたらしてくださるのです。

後ろに迫るエジプトの大軍とは、私たちが奴隷にして引き回す、闇の力を現します。どんなにあがいても、自分が自分らしく、自由に生きていくことをさせない闇の力です。してはならぬと思いつつも、せざるをえなくして、滅びに引きずり込んでいく悪の支配です。神さまは、その力を滅ぼして、解放して下さるのです。

こうして、海と大軍、滅びと悪の支配から完全に脱出できたイスラエルの民は、高らかに歌いました。「主は私の力、わたしの歌、主はわたしの救いとなってくださった。この方こそわたしの神、わたしは彼をたたえ

る。わたしの父の神、わたしは彼をあがめる。」(15:2)

神さまは、昔も今もまたこれからも不変のお方です。私たちも、たとえどんなピンチに襲われても、「恐れ  
てはならない。私が戦う」とおっしゃる御声を聞いて、気を落ち着けて、静かに神さまの導きに従う者になり  
たいものです。

### [結] どんな叫びでも

或る母親がこのように語っていました。「息子が大学に入って半年で行かなくなりました。顔を見ると『どう  
するのよ!』と言ってしまふ。これでは泥沼に落ち込んでしまふ。何とかしなければ。この子にとっての絶望的  
な状況を想像してみました。病気で死ぬ。自殺する。他人を殺してしまふ。殺される。それに比べれば、今  
の不登校などはるかに益した。未だいい方だ。未だいい方なのだ」と繰り返し自分に言い聞かせて、不安と  
戦いました」。

もう一人の母親はこう語ってくれました。「神さまは海の中に、一筋の道を切り開いて前進させてくださる  
お方。必ずこの子の前にも、道が開けてくる。『恐れてはならない。落ち着いて、この子のために行なわれ  
る主の救いを見なさい』との神さまからのお言葉を祈りの中で聞きとりながら、待つことが出来ました」。

背後から襲いかかろうとするエジプトの軍勢を見た時、イスラエルの人々は非常に恐れて、「主に向かっ  
て叫んだ」(14:10)とあります。何と叫んだのでしょうか? モーセに対しては「荒れ野に連出して殺そうとし  
たのか」とわめいていますから、同じ様な呪いの言葉であったのでしょうか。でも何はともあれ神さまに対して  
叫んだのです。

新約聖書には、「私たちがどう祈ったらよいか知らない時でさえも、聖霊が私たちのために、うめきをもっ  
て執り成して下さる」(ローマ8:26)と語られています。そうです。切羽詰ったら、立派な信仰的な祈りなど  
出てこないでしょう。口に出せば、「放って置いてくれ。奴隷の方がましだ」とわめいてしまうでしょう。それ  
でもよいのです。とにかく神さまに向って叫びわめく者でありたいですね。

神さまは必ずや、「恐れてはならない。落ち着きなさい。静かにしていなさい。貴方のために行なわれる  
救いを見ていなさい」という御声を聞き取らせて下さるに違いありません。そして絶対絶命の窮地から、必  
ずや救い出してく下さると確信します。何しろ神さまは、イエス・キリストをさえ惜しまずに、死に渡して、私  
たちを救う十字架の救いを下さったお方ですから、私たちのどんな叫びをも、聞いて応えて下さるのです。

完